

静岡新聞 2026 年 7 月 15 日 付

論壇

東京大名誉教授(国際経済学)

伊藤 元重

大学で若い学生の人たちの議論を聞いていると、AI(人工知能)の利用が広がっていることを実感する。学生のレポートの内容の質が高くなっているからだ。AIが教育にどのような影響を及ぼしているのかいろいろと考えてしまう。

今でも週に1回ぐらいのペースで大学を出かけて、ゼミ(演習)として学生とさまざまなテーマで議論をする機会がある。「長期国債の需給構造の変化」、「加速するAI投資」、「高度な外国人財の獲得競争」、「ユーロ共同債の発行の是非」など、毎週違ったテーマで学生による発表や討論を聞いている。

毎週異なったテーマで報告を準備して議論するのは大変なことだ。それを、今の学生はうまくこなしている。1週間という短い準備期間であ

AIの力を借りて自ら思考

るにもかかわらず、質の高いプレゼンテーションを作成して、それを基に中身の濃い議論が行われる。

昔だったら、ゼミの中でこうした議論するのは難しかった。専門的な、しかも毎週異なるテーマについて、報告をまとめて議論するのは困難であつたからだ。質の高い報告をまとめるには何週間もかかった。だから月に1回ぐらいのペースであれば質の高い議論はできたかもしれないが、今のように毎週というのはとても無理であつた。

言うまでもなく、今の学生たちが毎週のように違ったトピックで中身の濃いレポートをまとめてくることができるのは、AIを活用しているからだ。基礎的な知識がなくても、AIを利用すれば短時間でかなり中身の濃いレポートをまとめることができる。AIを利用してまとめたレポートなど意味がないのではないか。そう考える人もいるかもしれない。

実はそうでもないのだ。確かにレポートをまとめるだけであるなら、AIの助けを借りても、学生の能力向上につながるものではない。しかし、そのレポートを利用しながら中身の濃い議論をすることができるならば話は別である。

AIを活用して作成した質の高いレポートを出発点として、そこから密度の高い議論を行うことができるなら、その討議から学生の学ぶことは多い。AIの助けを借りるおかげで、毎週異なったテーマで議論をするということが可能となるのだ。

AIのおかげもあって、私のゼミでは毎週異なったテーマで密度の高い議論を行うことが可能となった。AIに全てを求めるのではなく、AIの助けを借りながら自分の力で考える力を鍛えるのだ。

私が大学のゼミで経験していることは、社会がAIとどう共存するべきなのかを考える上で重要な示唆を提供してくれる。AIを活用することで、私たちはこれまでよりはるかに簡便により多くの知識を得ることができる。チャットGPTでもジェミニでも、利用可能なAIツールを使ってみることだ。

その上で、AIのツールを使うだけで終わってはいけない。AIの助けで得られた知識や情報を出発点として、その先に自らの思考を進めていくことが求められる。AIにできることはAIに委ねながら、AIにできないことは何なのか常に考えていることが求められる。